

秋田藩重臣が記した赤穂事件

古文書倶楽部



【発行】
秋田県公文書館
古文書班
2007.12
第20号

衝撃の真相は？今号の「古文書倶楽部」では、年末年始の時代劇の定番「忠臣蔵」を特集しました。江戸城松之廊下で起きた浅野内匠頭の刃傷事件は秋田藩家老の日記に詳しく記されていた！

「元禄十五年（一七〇二）十二月、主君浅野内匠頭長矩の恥辱をそぐため、大石内蔵助以下四十七人の旧家臣が吉良上野介義央を討つた事件」は、それに先行する「元禄十四年（一七〇一）三月十四日、江戸城松之廊下で勅使接待役の赤穂藩主浅野内匠頭長矩が、高家肝煎の吉良上野介義央に斬りつけて失敗し、切腹・城地没収・断絶となった事件」と合わせて、「赤穂事件」と呼ばれていますが、事件は歌舞伎や人形浄瑠璃、そして時代劇で「忠臣蔵」として脚色され、あまりにも有名です。

しかし「赤穂事件」の全貌を記した同時代の史料は驚くほど少なく、徳川幕府の公式史料「徳川実紀」にも事件の記載はあるのですが、それさえも後世に編纂されたものなのです。従って刃傷事件を起こした浅野内匠頭の動機についても「賄賂説」、「塩田遺恨説」、「嫌がらせ説」、「病気発作説」等が言われますが、いずれも決定的なものではないのです。

ところが、元禄・宝永期に秋田藩の家老を勤めた岡本元朝の日記を見ると、実に詳しい描写があるのです。「岡本元朝日記」元禄十四年（一七〇一）三月二十五日条は「くもる、昨晚江戸より十兵衛（江戸詰大番頭の江十兵衛）状越申候」から始まります。つまり松之廊下の刃傷事件から十日後には秋田に事件の情報が伝わっているのです。続いて見てみましょう。

今月十七日日付に御座候、江戸ニ珍事候由。故八公家衆勅使二御下り候由、右之御馳走ヲ浅野内匠殿播州赤宇五万石ノ主へ被仰付よし、当月十四日ニ於御城、勅答御饗心の筈ニ御座候て公家衆登城、内匠殿御同道被成候由、最早將軍家出御近節大廊下と申所ニ而、吉良上野介殿ヲ後より内匠殿小サ刀ニて切付被成候由。うす手ニ候由。上野介殿刀ニ手ヲかけ何ヲするやと取て返給ヲ、畠山民部殿、今御老人誰か両方取



押、内匠殿乱気と被^{もつ}申^{なされ}候由、是にて上野殿もしつまり被^{なされ}成^{なされ}候由。則内匠殿ヲ八田村右京殿へ御預ケ被^{なされ}成、其夜中二切腹ニ被^{おせ}仰付候由。上野殿養生いたし罷^{まかり}出^{いで}可^{あつ}相^{あつ}勤^む由被^{おせ}仰付候ト云々。

皆様どうぞです、この臨場感！

松之廊下で斬りかかる浅野内匠頭、「何をするや」と叫ぶ吉良上野介。「誰かもう一人来てくれ！内匠頭殿乱気！」と浅野内匠頭を取り押さえる畠山民部（高家）。そして浅野内匠頭はその夜に切腹。吉良はお咎めなし…

秋田の岡本元朝に手紙を送った渋江十兵衛は、浅野の取った行動を「内匠殿乱心二候」と判断しています。

しかし、岡本元朝の同日の日記を見ると、斬られた吉良上野介について、渋江十兵衛は次のように書き送って来たことがわかります。

吉良殿日頃かくなきおうへい人ノ由。又手ノ悪キ人にて、且物ヲ方々よりこい取被^{なされ}成候事多候由。先年藤堂和泉殿へ始て御振舞二御越候時モ、雪舟ノ三ふく対御かけ候へ八則こひ取被^{なされ}成候よし。ケ様之事方々にて候故、此方様へ御越之時モ御出入衆御内々にて目入候能^よ御道具被^{なされ}出^{いで}候事御無用と御申被^{なされ}成候由二候。

つまり吉良は日頃から横柄な人で、何か珍しいものを見るとすぐ欲しがり、藤堂家（津藩）の屋敷にあつた雪舟の掛け軸を持って行つた。だから吉良が藩邸に来る時は、良い道具はしまふようにアドバイスをされていたというのです。

時代劇の吉良像は、あながち間違いではない！

しかし「岡本元朝日記」を通して読んでみて気がつくことは、秋田藩江戸藩邸では、幕府老中や実力者の側用人柳沢吉保、そして勘定奉行荻原重秀などに対する進物は念入りに行つていくということ。それは、賄賂を贈つて取り入るといふよりも、進物等につきあいを深くすること様々な情報（もしくは指導）を得て幕閣との関係を円滑にし、幕府への奉公を大過なく果たすことに目的があるのではないかと思わ



れます。

もしかしたら、赤穂藩ももう少し情報収集を目的とした気配りをしていけば、刃傷事件も起きず、お家の取り潰しになることも無かつたかもしれませんね。
(伊藤成孝)

史料の紹介

記事と共に紹介した三枚の絵は当館所蔵「錦絵 仮名手本忠臣蔵」（吉田七八）です。ぜひ手にとってお楽しみください。